

国立大学における自校史教育の意義

——名古屋大学を事例として——

山口拓史

はじめに

- 一、自校史教育実施の背景
 - 二、自校史教育の位置づけ
 - 三、自校史教育の実際
- おわりに——自校史教育の展望

はじめに

近年、大学生に対して自らの大学の歴史を講義する科目を設ける大学が増加している。⁽¹⁾「自校史教育」とも呼ばれるこの取り組みは、名古屋大学においても一九九九年度から実施されている。しかし全国的な動向をみると、こうした自校史教育の実施については国立大学よりも私立大学の方が先行していたといえる。その理由の一つとして、私立大学ではいわゆる「建学の精神」に基づくアイデンティティの追究が不断に求められる過程で、自校史というものが常に意識されている傾向が強いことをあげることができるであろう。しかし、「建学の精神」とまではいわずとも、大学自体のアイデンティティの確立と、学生を中心とした構成員のアイデンティティ確立の支援は、私立大学のみ限定されず、これからの国立大学（とりわけ国立大学法人化後）にも期待されることではないだろうか。本稿では、ここ数年を経て自校史教育が次第に定着化してきたことを踏まえて、名古屋大学における自校史教育の事例を紹介しつつ、国立大学における自校史教育について若干の考察を行なうことにしたい。

一、自校史教育実施の背景

名古屋大学において自校史教育が実際に行なわれるようになったのは、一九九九年度以降のことである。次章以降において本学での自校史教育に触れるのに先立って、本章ではその自校史教育実施の背景について述べておく必要があるだろう。⁽²⁾

(一) 大学史資料室の設置

背景の第一は、自校史教育の実施主体となる名古屋大学史資料室(現在の名古屋大学大学史資料室の前身。以下、本稿では便宜上原則として、名古屋大学史資料室および名古屋大学大学史資料室の区別なく「大学史資料室」という。)が一九九六年度に設置されたことである。名古屋大学では、初めての沿革史『名古屋大学五十年史』編纂事業のために名古屋大学史編集室を一九八五年に設けていた。この年史編纂事業では一九九五年までに部局史編一冊、写真集一冊、通史編二冊が刊行され、大学史編集室は同年度末に廃止された。そして翌九六年度には「名古屋大学史に係わる資料の恒常的な収集、整理、保存及び活用並びに調査及び研究を行うため」に名古屋大学史資料室が新たに設置された。³⁾

「大学史編集室」を廃止して「大学史資料室」を設置するという組織改廃行為は、外見上、両組織の連続性を想起させてしまう傾向が強いかもれない。しかし、それぞれの組織の目的が全く異なるものであるという事実は、⁴⁾ 各々の組織規程における設置目的条項の内容から明確に理解できることである。その点において、大学史編纂を専業とする組織には教育活動を行なう機能が本来的に予定されていないと指摘することは、形式上、可能であるかもしれない。⁵⁾

ただし、大学史資料室は、大学史編纂を目的とする組織ではなく日本における新たなタイプの大学アーカイブズとしての機能を志向する組織として、保存資料の活用という面からみても、また全学に貢献するという面からみても、自校史教育を行なうことは大学史資料室が担うべき機能の一つであると考えている。

(三) 先行事例の存在

背景の第二として、一九九六年度には一部の私立大学で自校史教育の試みがなされており、一九九七年度以降は私立大学では明治大学や早稲田大学が、また国立大学では九州大学がそれぞれ自校史教育を正式に開講していたことを指摘することができる。

明治大学で一九九七年度に開設された自校史講義は、「日本近代史と明治大学」であった。同大学において自校史教育を実施することになった要因の一つとして、「大学の個性化、カリキュラム改革、ひいては大学改革」という観点があつたとされている。⁽⁷⁾ 同大学では、一九九七年度および翌九八年度は、四つあるキャンパスのうちの文系一・二年を対象とする一キャンパスでの開講であつたが、一九九九年からは他の三キャンパスでの開講要望に応えて全キャンパスでの開講に拡充されている。こうした自校史講義拡充は、同大学が自校史教育に少なからぬ意義を認めていることの現われであろう。⁽⁸⁾

一方、早稲田大学で一九九七年度に開講された自校史講義は「歴史的存在としての「早稲田」の歴史に学ぶ」であつた。同講義は、全学年を対象に開講されており、「大学文化史」という観点から自校史を講義することをめざしていた。

また、同じ一九九七年度に九州大学は、一・二年生を中心として三・四年生の受講も認める自校史教育「九州大学の歴史」を開講している。同大学では、その翌年度に学内研究プロジェクトとして共同研究「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」を立ち上げ、延べ三学期間の試行授業として自校史教育を展開している。⁽⁹⁾ この試行授業は、当初、「偏差値のみを基準に入学してくる学生たちに対して、自らの大学の歴史を学ばせることにより、アイデンティティの確立とモチベーションの喚起を促すとともに、低年次教育への貢献をなすこと」

を目的に開始したものであったが、次第に「教官・学生を問わず、大学人としてのアカウンタピリティ、そのための基礎史料・基礎作業としての大学史の授業を意識するようになって来た」とされている¹⁰。なお、同大学の試行授業（三学期間）では、延べ一五七名（一年生一四三名、二年生一三名、四年生一名）が受講したとされている。

以上のような他大学の先行事例は、名古屋大学で自校史教育が一九九九年に開講された点ならびに次章で述べらる名古屋大学における自校史教育の内容編成において、少なからぬ影響を及ぼしている。

（三）学内教員による提言

背景の第三は、一九九六年度末発行の『名古屋大学史資料室ニュース』に「名古屋大学史開講の意義」と題する随想が寄稿されたことである¹¹。寄稿者は、当時大学史資料委員会副委員長を務められた農学部教授の河野恭廣氏（現在は本学名誉教授）である。

同氏は、その随想の中で自らの体験を踏まえながら、自校史教育についての達見を示している。やや長文になるが、氏の指摘が今日において一層意義を深めていると考えられるので、原文のまま引用しておきたい¹²。

私は、「名古屋大学史」を、たとえば共通基礎科目の一つとして開講すべきではないかと考えている。マスコミなどは、今の多くの大学生は、大学を就職のために止むを得ず通過しなければならぬところとしてしか捉えていないと言う。学生の没個性、あるいは平均化などを嘆く声が大学関係者からも聞こえてくる。私は、学生のなかのマスクされた形質を発現させるのが大学の責務であると考えている。その一つの方法は、先ず自分の学ぶ大学の歴史―学風―を知る機会の学生への提供であろう。（中略）

大学史資料を利用し、それ自体が大学史資料となる自己点検・自己評価報告書の多くは、その目を学外社会に向け、社会の多様な価値観を大学に反映する新入生の存在に、あまり目を向けてはいないように思われる。私は、新入生にも自己点検・自己評価の結果を示し、ともに大学の学問研究・教育研究の充実と発展を図るべきではないかと考えている。まさに名古屋大学の学風は、このようにして五〇年有余の時間軸上で、多くの優れた先達と学生がともに築いてきた歴史の所産ではないだろうか。この学風を次代へ継承し、発展させるために、大学史の開講などを通じて名古屋大学が具体的に挑戦する時期に来ていると思う。

(四) 初任職員研修での自校史講義

背景の第四として、一九九八年度実施の初任職員研修（新任の大学事務職員を対象とする研修）から三年間、同研修プログラムに「名古屋大学の歴史」という講義が組み入れられたことを指摘することができる。初任職員研修プログラムに自校史に関する講義を加えることを発案したのは、事務局総務部人事課であった。一九九七年度末に同人事課から大学史資料室に対して研修プログラムの趣旨説明および講義担当要請があり、それを受けて翌九八年四月開催の初任職員研修から自校史講義が行なわれたのである。その後、初任職員研修における自校史講義は、同研修プログラム全体が変更されるまでの三年間実施された。

この職員研修における自校史講義は、その後の大学史資料室の活動に少なからぬ意味をもったといえる。先に第一の背景として述べたように、大学史資料室以前の大学史編集室は、文字通り、大学史編纂專業組織であり、自校史教育を展開するためのノウハウを持ち合わせてはいなかった。その点において、新たな組織として、大学史資料の活用という使命を付与された大学史資料室が、保存資料の閲覧サービスや公開・展示に代表される資料活用機能の

一形態として、教育機能の開発に着目することには必然性があつたといえる。

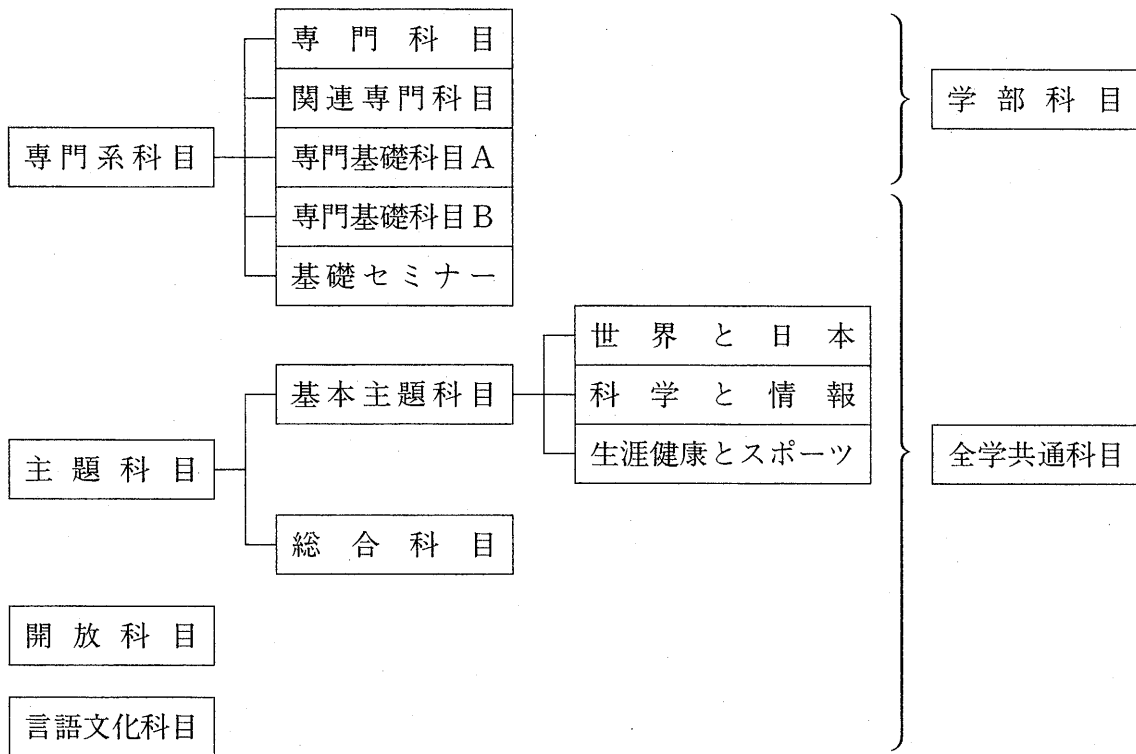
二、自校史教育の位置づけ

すでに述べたように、名古屋大学における自校史教育活動は、大学史資料室が主体となつて一九九九年度から実施されており、今年度が四年目にあたる。本章では、次章において自校史教育の実際について述べるのに先立って、名古屋大学のカリキュラム上において自校史教育としての講義がどのように位置づけられているのかについて述べておく。

(一) 主題科目としての自校史教育

名古屋大学では、一九九一年の大学設置基準の一部改正（いわゆる大学設置基準の大綱化）を契機に学内組織・カリキュラム編成の再編を行ない、一九九四年度から学部四年一貫教育（医学部医学科では六年一貫教育）を実施している。学部四年一貫教育では、各学部が自主的・主体的にカリキュラム編成を行なうが、すべての学部や複数の学部⁽¹³⁾にまたがって開講する授業科目については、共通の理念に基づいて全学が協力して実施することとされている。その結果、名古屋大学での学部教育科目は、「教育科目区分図」（以下、「科目区分図」という）に示すように、全体として「専門系科目」「主題科目」「開放科目」「言語文化科目」の四科目のいずれかに区分された上で、さらに各学部が独自に開講する「学部科目」と既述のように全学が協力して実施する「全学共通科目」に区分されている。⁽¹⁴⁾

教育科目区分図



本稿で取り上げている自校史教育は、全学共通科目として位置づけられている。それは、大前提として、実施主体である大学史資料室が学生定員をもつ学部組織ではないため学部科目としての開講が認められないという組織・制度上の理由によるものである。しかし、仮にそうした組織・制度上の制約的理由が存在しないとしても、自校史教育というものが学生の所属学部の壁を越えて文字通り全学的に実施されるべきものであるという性質上、積極的な理由から全学共通科目として位置づけられるものであることは明らかであろう。

ただし、全学共通科目は、「科目区分図」でも確認できるように、「専門系科目」の一部と「主題科目」「開放科目」「言語文化科目」という先述の四科目を含んでいる。そして、これらの各科目の定義等に照らすと、自校史講義は「主題科目」として開講することが最も望ましいと判断されるのが現状である。具体的には、「主題科目」の中の「基本主題科目」あるいは「総合科目」としての開講である。

(二) 基本主題科目と総合科目

「名古屋大学における自校史講義一覧(年度別比較)」(以下、「講義一覧」という)は、一九九九年度から二〇〇二年度までに大学史資料室が行なった自校史講義について、全学共通科目上の位置づけ(「区分」)、「講義名」、各回の「講義主題」等を整理したものである。以下、本節では、この講義一覧中の「区分」と「講義名」について述べておきたい。

一九九九年度の開講以来、自校史講義は一貫して主題科目に位置づけられている。このうち、二〇〇一年度までの三年間は「総合科目」としての開講で、二〇〇二年度は「基本主題科目」としての開講である。まずここでは、自校史講義を「総合科目」¹⁵ 枠で実施することと「基本主題科目」¹⁶ 枠で実施することの相違について述べておきたい。

一九九九年度当時、教員スタッフ四名で構成されていた大学史資料室では、自校史教育という発想がほとんど意識されていなかった本学のカリキュラムにおいて、他大学の先行事例等を勘案しながらも自校史講義の開講に際して比較的制約が少ない科目区分として、全学部を対象としたⅣ期(二年次後期)開講の選択科目である「総合科目」を選んだ。本学における「総合科目」は「社会的・学問的に重要な特定の主題について、複数の部局に属する教官が、それぞれの専門的立場に基づいて協力し、学際的な講義を行うことにより、多面的な理解と総合的な洞察力とを獲得させる科目」とされてお¹⁵り、教育史等の専門的立場から学内教員あるいは学外教員(非常勤講師)の協力を得ながら自校史講義を展開できるものと判断したのである。また、この「総合科目」では講義名を自由に設定することができたので、学際的な講義であることを念頭において講義名を「日本の大学―近代日本と名古屋大学―」とした。なお、大学史資料室は二〇〇〇年度以降教員スタッフ三名の組織となっているが、「区分」「講義名」に関しては二〇〇一年度までの三年間は変更をしなかった。

名古屋大学における自校史講義一覧（年度別比較）

	1999(平成11)年度	2000(平成12)年度	2001(平成13)年度	2002(平成14)年度
区分	主題科目・総合科目	主題科目・総合科目	主題科目・総合科目	主題科目・基本主題科目・ 世界と日本・世界の中の日本
講義名	日本の大学 —近代日本と名古屋大学—	日本の大学 —近代日本と名古屋大学—	日本の大学 —近代日本と名古屋大学—	日本の社会と歴史
1回	概説	日本の大学—概説—	洋学の実答と専門教育制度の整備	洋学の実答と専門教育制度の整備
2回	○名古屋大学の源流	名古屋大学の源流	旧制大学の成立と展開	旧制大学の成立
3回	◎名古屋帝国大学	◎名古屋帝国大学	旧制高等教育諸学校の成立と展開 (1)	旧制大学の展開
4回	第八高等学校	◎岡崎高等師範学校	旧制高等教育諸学校の成立と展開 (2)	旧制高等教育諸学校の成立と展開 (1)
5回	名古屋高等商業学校	第八高等学校	旧制高等教育諸学校の成立と展開 (3)	旧制高等教育諸学校の成立と展開 (2)
6回	◎岡崎高等師範学校	名古屋高等商業学校	新制大学の成立	旧制高等教育諸学校の成立と展開 (3)
7回	戦時下の高等教育と戦後復興	戦時下の高等教育と戦後復興	大学における戦後改革	新制大学の成立
8回	新制名古屋大学への摸索	新制名古屋大学への摸索	大学院教育と名古屋大学史	大学における戦後改革
9回	○キャンパス計画と学校建築1	○キャンパス計画と学校建築1	キャンパス史からみた名古屋大学	大学院教育と名古屋大学史
10回	○キャンパス計画と学校建築2	○キャンパス計画と学校建築2	○名古屋大学のスポーツの歩み	キャンパス史からみた名古屋大学
11回	大学改革の同時代史	大学改革の同時代史	○寄付建物と名古屋大学史	○名古屋大学のスポーツの歩み
12回	大学アーカイブズの意義と可能性	大学アーカイブズの意義と可能性		○学内建築物と名古屋大学史
13回				人物からみた名古屋大学史

注) *「区分」は、「全学共通科目」全体における自校史講義の位置づけを示している。

* 講義主題に付した◎印はその回が学外非常勤講師による講義、○印はその回が大学史資料室スタッフ以外の学内内部局講師による講義であることを示しており、無印のものはすべて大学史資料室スタッフによる講義である。

次に、「基本主題科目」枠で実施した二〇〇二年度について述べる。「基本主題科目」は「現代社会が直面する基本的な諸課題を数個の主題に総括し、各主題に則して、複数の授業科目を履修させる科目」とされている⁽¹⁶⁾。ここにいう数個の主題については、二〇〇二年度現在、次の三つの主題が設定されている。

「世界と日本」|| 副主題として、近代世界のあゆみ、世界の中の日本、文化の接触と交流、環境と社会をかけた、現在の世界の中で日本が置かれている位置を究明する。

「科学と情報」|| 副主題として、情報と数理、情報と社会、自然の認識、環境と人間をかけた、情報が人間に課する諸問題に対して、その解決方法を探る。

「生涯健康とスポーツ」|| 副主題として、生涯健康と青年期、現代社会と生涯スポーツをかけた、人間が生涯にわたって健康とスポーツに対して、目的意識的に取り組む実践的能力とその基礎となる科学的知識を深める。

ここで、講義一覧の二〇〇二年度の欄をみると、同年度の自校史講義が「基本主題科目」の主題「世界と日本」の中の副主題「世界の中の日本」という枠の中で、講義名が「日本の社会と歴史」として開講されていることがわかる。自校史講義であるにもかかわらず、それが「日本の社会と歴史」という講義名で実施されている理由については、いまし説明が必要であろう。それは、「基本主題科目」内の授業科目名（|| 講義名）があらかじめ固定されているためである。二〇〇二年度現在、自校史講義が位置づけられている主題「世界と日本」の副主題「世界の中の日本」という区分内では、「日本の社会と歴史」「東洋の社会と歴史」「西洋の社会と歴史」「美術の展開」「日本の憲法」「現代社会と法」「民主主義の理念と現実」「国際化と経済活動」という八つの授業科目名が事前に設定されて

いるのである。したがって、「世界の中の日本」という副主題区分で開講される自校史講義は、それら既定の八つの授業科目名の中から一つを選択することが求められ、その結果「日本の社会と歴史」という授業科目名で実施されているのである。しかもその際、学生に配付される全学共通科目の時間割表ならびに授業要覧（シラバス）上でも自校史講義は「日本の社会と歴史」と表記されるのである。

実際には「名古屋大学の歴史」を内容とする講義が、全学共通科目というシステムの中では「日本の社会と歴史」という講義名で表現されるという状況は、何よりも学生の側からみて受講科目を選択する際の目安となる時間割表・授業要覧上において自校史講義が開講されていることが明示的でない点において、決して望ましいものではないことは明らかである。¹⁷⁾

さらに、自校史講義を「基本主題科目」として開講する際には、いくつかの長所・短所があった。例えば、自校史教育というものは、その性質上、できる限り低年次学生に対して実施されることが望ましい。その点では、IV期（二年次後期）学生しか対象にできない「総合科目」と比べると、I期（一年次前期）やII期（二年次後期）の学生も対象とできる「基本主題科目」は理想的な形態であった。しかし、その一方で「基本主題科目」では、講義対象となる学部が三グループに分けられていた。例えば、I期の全学部学生に自校史講義を行なう場合は、文学部・教育学部・経済学部の三学部向け（月曜日第三時限）、情報文化学部・理学部・医学部・農学部の四学部向け（木曜日第一時限）、工学部向け（金曜日第二時限）として、同じ講義を週三回行なう必要があったのである。そして現実問題として、大学史資料室が週三コマの講義を実施することは不可能であった。¹⁸⁾ その結果、二〇〇二年度は試行的に文学部・教育学部・経済学部の三学部のみを対象として自校史講義を開講することとしたのである。

三、自校史教育の実際

前章では自校史講義のカリキュラム上の位置づけについて触れたが、本章では、自校史教育の実際について述べておく。その際、各年度の講義実施方法等の違いに着目して、二〇〇〇年度以前の講義と二〇〇〇一年度以降の講義に区別して取り上げることとする。

(一) 二〇〇〇年度以前の自校史講義

自校史講義の実施初年度にあたる一九九九年度は、既述のとおり「総合科目」としてIV期（二年次後期）の開講であった。講義全体の目的とねらいは、次のように設定されている。¹⁹⁾

日本の大学はいま大きな変貌を遂げつつある、そう一般に報じられている。しかし、名古屋大学に所属するものとして、この大学の現在をどのように認識するべきなのであろうか。それは名古屋大学の歴史にたずねるしかない。名古屋大学とは過去・現在・未来において何であり何であり得るのか。本講義は、名古屋大学の歴史を中心としながらも、高等教育史ひいては日本近代史としての展望を意図する（以下略）。

また、全一二回行なわれた講義各回の主題は、講義一覧に示したとおりである。一連の講義は、原則として時系列的に編成されている（二、三、七、八、一一の各回）。しかし、本学の沿革史上、新制大学設置の際に包括した旧制高等教育諸学校への言及は避けられないため、それら包括学校についての講義を設定している（四、六回）。また、

講義全体が教育史あるいは教育制度史的な視点からのアプローチに偏りがちになる傾向を緩和する目的もかねて、特論的な講義を盛り込んでいる(九、一〇回)⁽²⁰⁾。

以上が、一九九九年度における自校史講義の概要である。そして、翌二〇〇〇年度における自校史講義においても、この形式・内容はほぼ踏襲されている。では、こうした自校史講義に対する受講生の反応はどのようなものであったのかについて、二〇〇〇年度の事例をもとに述べておきたい。

二〇〇〇年度の自校史講義は、IV期(二年次後期)月曜日第二時限での開講であり、受講者数は一二名である⁽²¹⁾。講義では、毎回終了時に簡単な感想を書く時間を設けるようにしている。与えられる時間は短いにもかかわらず、受講生のほぼ全員が毎回様々な感想や疑問点などをコンパクトに書き綴っている。ここでは、講義初期ならびに講義末期の感想の中からいくつかを紹介しておく⁽²²⁾。

「自分の通っている大学のことをもつとよく知りたかったので、この講義を選んだ。最初、講義室に入った時にその部屋の狭さと少人数なものには驚いた。」(①)

「日本の大学、名古屋大学の歴史について興味深く話を聞いた。理学部の専門科目では学ぶことができないような話をこれからも楽しみにしている。」(①)

「普段何気なく通っている大学だが、細部に渡っていろいろな計画がされていることを知った。これからは大学キャンパスに限らず、いろいろな建物を少し興味をもって見るとおもしろいかもしれない。」(⑩)

「今日もいろいろとためになった。自分は大学院へは行かず就職するつもりだったが、今日の講義で歴史を学びプロフェッショナルの教育も受けようと思う。」(⑪)

「希望した総合科目が取れてよかった。今まで名古屋大学についてはほとんど何の知識もなかったが、講義を受けたことによって少しは大学について知ることができたと思う。」(12)

「通常の専門科目とは全然違ったことを毎回やるので面白かった。大学についての知識が増えた。」(12)

この二〇〇〇年度の全学共通科目については、全学的に学生授業アンケートが実施されているので、その結果についても触れておきたい。アンケートの方法は、設問内容に対する該当度を五段階で回答させて点数化するものであるが、自校史講義については次のような結果となっている(へへ内は総合科目全体の平均値を示す²³)。

- 問一 シラバスはわかりやすいか。 三・九△三・九▽ポイント
- 問二 授業選択にシラバスは役立ったか。 四・二△四・一▽ポイント
- 問三 授業に意欲的に取り組んだか。 三・八△三・五▽ポイント
- 問四 教科書・配布資料は適切だったか。 四・二△三・五▽ポイント
- 問五 授業内容を理解できたか。 四・一△三・五▽ポイント
- 問六 教官の熱意は感じられたか。 四・六△三・八▽ポイント
- 問七 学んだことへの興味が増したか。 四・一△三・七▽ポイント
- 問八 将来にとって「ためになる」と思うか。 三・八△三・七▽ポイント
- 問九 ティーチング・アシスタントがいてよかったか。 〇△三・五▽ポイント(非該当)
- 問二〇 総合的にみて授業に満足したか。 四・一△三・七▽ポイント

以上のような受講生感想文やアンケートも参考にしながら、二〇〇〇年度以前の自校史講義に関連して若干の考察を加えておきたい。

第一は、受講者数についてである。二〇〇〇年度の受講者数が一二名であったことはすでに述べたが、開講初年度である一九九九年年度の受講者数は一八名であった。大学史資料室にとっても、受講者数が二〇名にも至らないという状況は予想外のことであった。感想文やアンケート結果からも読み取れるように、受講した学生の評価は決して低くない点を考えると、講義内容が学生の興味・関心から大きく隔たっているとはいえないであろう。むしろ問題は、新しいタイプの講義としての自校史講義がまだ十分に認知されていないという点にあると考えられるのである。そして、この問題は、前章で述べた自校史講義の位置づけ問題とも密接に関連していると考えられる。つまり、全学共通科目カリキュラム上、総合科目は全学部を対象としてIV期の月曜日第一時限または第二時限のいずれかの時間帯でしか開講できないため、学生の側からみれば同じ時間帯に複数開講されている総合科目の中から最大で二科目の選択しかできないのである。ちなみに、二〇〇〇年度の場合をみると、月曜第一時限開講の総合科目は四科目、同第二時限開講のものは二九科目となっている。したがって、自校史講義受講者は、同じ時間帯に開講されている他の二八科目を「犠牲」にせざるを得ないのが現状である。この問題は、自校史教育を「総合科目」という区分で実施すること自体の検討を迫るものであり、さらにいえば、自校史教育に対する名古屋大学の姿勢を問うものでもあると考えられる。

第二は、主に受講者感想文によって推測できることであるが、今日の学生は自分が所属する大学について歴史その他を学びたいという意識を少なからず持っているのではないかということである。それは、第一章で触れた先行事例や河野氏の随想によっても裏付けることができるであろうが、次に掲げるように寺崎昌男氏(桜美林大学教授・

東京大学名誉教授)も指摘するところである⁽²⁴⁾。

(前略)大学のアイデンティティを求めているのは教職員だけではない。教育経験を振り返って言うのと、とりわけ学生たちが、それを強く求めている。例えば明治大学という自分の「居場所」を確認することが、同時に自分の存在を確かめる重要な方法であることを、彼らは潜在的に知っている。(中略)なぜ自分たちはこの大学で学んでいるのか、なぜここににいるのかを自問し、他方で「充実した个性的教育」を求める学生たちの要望は、極めて強い。

第三は、自校史講義の方法論についてである。すでに述べたように、自校史講義では名古屋大学の歴史を時系列的に解説するという方法を原則としている。いうまでもなく、こうした方法は、歴史的事実を把握させる際には有効である。しかし、講義全体を一貫して時系列的に展開することは、受講生の側からみれば「単調な」講義となり、学習意欲を減退させることにもなりかねないであろう。その点に関連して、一連の講義の中に「キャンパス計画と学校建築」という主題を盛り込んだことに対する学生の反応は、予想以上に好評であったといえる。これを契機として、大学史資料室では、時系列な講義を前提としながらも可能な限りトピック的な講義も組み入れるという方法を検討することになったのである。その結果が翌二〇〇一年度以降の自校史講義に反映されているのであるが、それについては次節で述べることにする。

(三) 二〇〇一年度以降の自校史講義

二〇〇一年度の自校史講義では、前年度と同じく総合科目「日本の大学―近代日本と名古屋大学―」としてIV期

月曜日第二時限の開講としたが、二〇〇二年度は、前章第二節で述べたように、「総合科目」ではなく「基本主題科目」としてI期（一年次前期）月曜日第三時限に開講した。各年度の受講者数は、二〇〇一年度が二三名で、二〇〇二年度が三三名であった。⁽²⁵⁾ なお、二〇〇一年度には授業要覧（シラバス）掲載の「講義の目的とねらい」を次のように改めて実施した。⁽²⁶⁾

近年、大学の内外において「大学改革」の必要性が叫ばれています。二一世紀を迎えた現在、よりよい将来を展望する営みとしての「改革」が切実に求められているのです。しかし、そうした改革の実施や評価は、現在あるいは過去に対する歴史的な認識を持たずに行なうことはできません。本講義のねらいは、名古屋大学の歴史を題材として日本の高等教育の歩みを振り返ることによって、歴史的存在としての大学に対する理解を深めるとともに、大学の将来像を見定める際の知見を広めることにあります。

さらに、二〇〇一年度以降の自校史講義は、前節で述べた二〇〇〇年度以前の自校史講義と比較して、次の点で異なっていた。すなわち、二〇〇一年度から講義全体を二つのセクションに分けたことである。一つは、従来と同じく時系列的に講義が展開される部分で、これを「総説編」と呼んでいる。もう一つは、一回毎にトピック的なテーマを設けて講義を行なう部分で、これを「各節編」と呼んでいる。二〇〇一年度は、前半七回分が総説編、後半四回分が各節編であり、二〇〇二年度は前半八回分が総説編、後半五回分が各節編であった。こうした講義編成は、前節末尾で述べた検討の結果に基づくものである。ただし、各節編の実施に踏み切るまでには、次のような準備―各節編向けの教材開発―が必要であった。それ以前の講義経験に照らして、総説編の各回講義は『名古屋大学五十年史』（通史編）を基本に組み立てるのが適切であることは明らかであった。しかし、新たに設ける各節編については、

まず何よりも受講生の立場からみて興味・関心を持てるようなテーマ選択が必要であるし、さらにはそのテーマに即した教材が必要であった。大学史資料室が二〇〇〇年度後半に刊行した「名大史ブックレット」シリーズは、そうした自校史教育（各節編）向けの教材である。⁽²⁷⁾

以上が二〇〇一年度以降の自校講義の概要であるが、それに対する受講生の反応はどうであったのだろうか。前節と同様にいくつかの感想文を紹介しておく。⁽²⁸⁾

「自分の通う大学について勉強できるいい機会と思うので、講義を楽しみにしています。」（総①）

「自分の大学がどのように作り上げられたかを知れるとよいです。」（総①）

「今まで名大の歴史なんて考えたこともなかったもので、これから楽しみです。」（基①）

「名大の源流がよくわかり、興味がわいてきた。」（基①）

「普段は僕たちにとってあまり目立たない事務の人たちが、名古屋大学の歴史において、かなり活躍したと聞いて驚きました。」（総⑨）

「ビデオを見て、同じ名古屋大学でも様々なことを研究していることがわかった。いつも同じ建物内や教室ばかりいるので、とても新鮮だった。」（基⑨）

「大学のキャンパスがどのような目的で、どんな場所に出来たのかということに興味を持てた。」（基⑩）

「豊田講堂や古川図書館などの建物の歴史などが理解できた。普段、何の意識もなくみてきたそれらの建物の見方が今後かわると思う。」（総⑪）

「名古屋大学の歴史に沿って、スポーツという別の面から見て、興味深く思いました。」（基⑪）

ここで、二〇〇一年度以降の自校史講義に関連して、若干の考察を加えておきたい。

第一は、受講者数についてである。すでに述べたように、二〇〇二年度の自校史講義受講者数は三三名で、二〇〇一年度のそれは二三名であった。この数字は、一学年あたり二〇〇〇名を超す学部学生が在籍する名古屋大学において微々たる数字であるに違いない。しかし、開講初年度の一九九九年度と比べれば、徐々にではあるが増加していることも事実である。現時点において、この受講者数増加の要因を確定するだけの資料・情報を持ち合せてはいない。しかし、講義内での反応や感想文をみた範囲では、受講生が自校史講義を選択した動機と大学史資料室の開講意図との間には多くの重なる部分があるとともに、実際に受講した学生は、自校史講義で様々な情報に触れることを通して、名古屋大学あるいは自分自身に対する意識を変化させていると推測される。もしこの推測が誤っていないとすれば、自校史講義が文字どおり「名古屋大学の歴史」であることを直截的に講義名称として示すことや、大学に対する新鮮さを持っている新入学生にとっての受講機会を改善することによって、自校史講義の受講者数が増加する可能性は決して小さくはないと思われる。

第二は、自校史講義の方法論に関してである。講義全体を総説編と各節編に二分するという形態は、期待どおりの効果をあげていると考えられる。『名古屋大学五十年史』（通史編）を基本文献として編成される総説編は、いわば自校史講義の脊柱に相当するものであり、前史（明治初年の医学校等の歴史）や包括学校（第八高等学校、名古屋高等商業学校、岡崎高等師範学校）史を含めた名古屋大学の沿革を講義するためのものである。実際に講義を行なっているとき、その総説編において受講生が自らの大学の歩みを確認しながら、その背景にある近代日本の社会動向についての認識も深めていることが理解できる。その点において、自校史講義としてのねらいの大半は達成できているとも考えられるが、受講生の学習意欲・態度の側面からみると、通史的内容の講義編成は教育方法として必

ずしも最適ではないことも事実である。各節編は、まさにこの課題を克服するために設けたものであり、二〇〇二年一月現在までに全五冊が刊行されている名大史ブックレットは、この各節編の教材として活用されている。⁽²⁹⁾ブックレットを利用した各節編においては、身近なテーマを通じて自らの大学を見つめなおす機会が得られるとともに、総説編で学んだ沿革を全く異なった視点から再確認できるため、受講生の反応は良好である。

第三に、自校史講義自体の内容と直接的な関係はないが、大学史資料室の教育活動について触れておきたい。これまで本稿で述べたように、大学史資料室は初任職員研修での自校史講義を一九九八年度からの三年間実施し、一九九九年以降は学部学生向けの自校史講義を開講している。そして本稿では直接触れなかったが、二〇〇二年度からは自校史講義とは別にIV期（二年次後期）総合科目として文書管理入門講義「情報公開と文書資料―文書の世界を歩く―」を開講している。これらの活動は一見して関連性がないようにみえるが、いずれも大学アーカイブズ機能を追求する大学史資料室としてその必要性を強く認識しているものである。⁽³⁰⁾特に、自校史講義に関しては、現在実施されていない職員研修等における講義も含めて、それを実施しうる組織は現状において大学史資料室以外には存在しないということ改めてここで付言しておきたい。

おわりに―自校史教育の展望

本稿では、一九九九年度以降、大学史資料室が実施してきた自校史教育について、実施の背景、学内カリキュラム上の位置づけ、自校史講義の実際という観点から述べてきた。本稿を終えるに際して、今後の自校史教育についての私見を述べておきたい。

名古屋大学では二〇〇三年度から、全学共通科目が見直されて新たに全学教育科目として実施される。これにもなつて従来の「総合科目」は「全学教養科目」として位置づけられる。このカリキュラム再編によって、大学史資料室では全学教養科目として自校史講義「名大の歴史をたどる」を実施する予定である。そして、この全学教養科目はⅢ期（二年次前期）およびⅣ期（二年次後期）で開講されることになっているため、Ⅲ期に自校史講義を実施する予定である。³¹ 二〇〇三年度からのこの変更は、今年度実施の基本主題科目のように一年次対象の開講とはならない点で、二〇〇〇年度以前の開講形態に戻るものである。ただし、今回は講義名をより直截的に改めて「名大の歴史をたどる」とした。これらの変更によって、次年度の自校史講義受講者数がどの程度のものとなるのかは現在のところ不明である。

本稿の冒頭で触れたように、国立大学・私立大学を問わない形で自校史教育が広がりを見せている。それは、各大学がそれを積極的に展開しようとするに足りるだけの意義が自校史教育にあることを示しているといえる。筆者は、自らの経験も踏まえた上で、自校史教育の必要性を確信する者である。ただし筆者は、自校史教育が学生に強制されるべきものであつてはならないと考えており、同時に、少なくとも全学部学生とりわけ新入学生にとって可能な限り開かれたものでなければならぬと考えている。その点からいうと、他の国立大学はともかく、名古屋大学における自校史講義はいまだ十分な位置づけを与えられているとはいひ難い状況にあるだろう。自校史講義は、厳密に言えば、現在の四年一貫教育の全学共通科目（二〇〇三年度からは全学教育科目）という範疇には収まらない講義科目であると考えられる。それは、大別して教養教育と専門教育という二つの領域から構成される従来の大学教育カリキュラムとは異なる次元の教育——例えば大学教育カリキュラム以前のガイダンス的カリキュラム——として理解する方が望ましいのかも知れない。

筆者は、これからの大学においては、入学直後の学生がその後の大学教育において自主的・自律的に学習を進められるような準備教育が求められるようになり、その準備教育の具体的内容として、自学自習のための図書館利用に関する教育や情報メディア・ネットワーク活用のための教育と並んで、アイデンティティ確立と学習意欲向上のための自校史教育が念頭に置かれるべきであると考えている。³²⁾

補注

- (1) 「母校『大学史』知り自信を」朝日新聞(名古屋本社版)二〇〇二年一〇月三三日々刊、八面。
- (2) 本章の記述は、神谷智・山口拓史「名古屋大学における自校史教育をめぐって」(全国大学史資料協議会東日本部会会報『大学アーカイヴズ』第二五号、二〇〇一年一〇月所収)の内容に今日までの最新状況を踏まえて大幅な加筆修正を行なったものである。
- (3) 一九九六年四月一日制定・施行「名古屋大学史資料室規程」第一条。
- (4) 名古屋大学史編集室は独自の規程を持たない組織であり、その設置目的等については、名古屋大学史編集委員会規程において「大学史の編集及び資料収集を行うため、委員会に名古屋大学史編集室を置く。」(第六条)と規定されているのみであった。名古屋大学史資料室の設置目的については、既述のとおりである。
- (5) ただし、筆者自身はその指摘を必ずしも支持するものではない。
- (6) 一九九六年度当時、学習院大学では文学部に総合基礎講座「記録保存と現代」が開講され、同講座の中に「学習院大学史」が含まれていた。これは、一つの独立した講義形態をとっていない点で本稿にいうところの自校史教育とは少し異なるものであるが、自校史を内容とする点で自校史教育の試みと位置づけることができる。
- (7) 以下、明治大学における自校史教育については、鈴木秀幸「明治大学における授業「日本近代史と明治大学」について」および長沼秀明「明治大学における授業実践——教師からの報告——」(いずれも全国大学史資料協議会東日本部会会報『大学アーカイ

ヴズ』第二三号、二〇〇〇年一月所収)による。

- (8) 参考までに紹介すると、同大学での自校史教育の目標は①日本の近代化と明治大学との係わりを社会的事象をつうじて明らかにする、②当時の明大生の精神風景を豊富な資料に基づき紹介する、③「学問的思考力と健全な愛校心」とを育てる、とされている。なお、③について前掲の長沼氏は、「もちろん、明治大学で学んでよかった」へ明治大学が好きだ」という気持ちの基本にあるとしても、「健全な」というからには、(中略)おそらく、これは母校を客観的に眺めることのできる目を在学中・卒業後ともにもつ、ということを意味するものであろう」としている。

- (9) 以下、九州大学における自校史教育については、折田悦郎「九州大学の歴史」「大学とは何か」とも考える」の授業について―大学史・大学論の意義―(九州大学大学史料室『九州大学大学史料室ニュース』第一四号、一九九九年一〇月所収)による。なお、その後の動向等については、折田悦郎「国立大学におけるアーカイブの設置とその機能」六、一〇―一二頁(京都大学大学文書館『京都大学大学文書館研究紀要』第一号、二〇〇二年一月所収)に触れられている。

- (10) 前掲折田「九州大学の歴史」「大学とは何か」とも考える」の授業について―大学史・大学論の意義―

- (11) 名古屋大学史料室『名古屋大学史料室ニュース』第二号、一九九七年三月発行。

- (12) 名古屋大学史料室『名古屋大学史料室ニュース』第二号、四頁、一九九七年三月発行。

- (13) 以下、特に断らない限り、学部四年一貫教育についての説明は、名古屋大学『2002 STUDENTS' GUIDE 全学共通科目履修の手引』に基づいている。

- (14) 「全学共通科目」の区分内容は、二〇〇二年四月一日改正施行「名古屋大学全学共通科目規程」第二条において次のように定められている。主題科目Ⅱ設定された主題に基づき、学際的な視野を広げ、相互関連的知識を深め総合的理解力と自主的判断力を高める科目。言語文化科目Ⅱ外国語の能力を高め、異文化理解を深めて、国際社会に相應しい教養を身に付けさせる科目。基礎セミナーⅡ少人数教育を強化し、コモンベイスニック教育を踏まえつつ、専門教育への転換・導入を図るセミナー形式の科目。

専門基礎科目BⅡ学部、学科等に共通した、広い意味での専門基礎科目。開放科目Ⅱ学生の自主的で多様な学習意欲に因應するため、学部等がその開講する専門系授業科目のうち、他学部の学生の受講が可能であり、かつ、有意義であると認められたものを指定

して開放する科目。

- (15) 二〇〇二年四月一日改正・施行「名古屋大学全学共通科目規程」第二条による。
- (16) 二〇〇二年四月一日改正・施行「名古屋大学全学共通科目規程」第二条による。
- (17) もちろん、学生自身が授業要覧を熟読すれば、複数存在する「日本の社会と歴史」の中から自校史講義を発見することは可能である。しかし、それは学務情報を提供する側からみても望ましい状況ではないといえるだろう。
- (18) 大学史資料室にとって、I期の全学部学生に対する自校講義の開講は理想的なものである。しかし、現在の大学史資料室の人員態勢から判断して、毎週三コマの自校史講義を担当することはあまりにも負担が大きくて実施困難であった。
- (19) 名古屋大学『1999 SYLLABUS 全学共通科目授業要覧』による。
- (20) なお、最終回(一二回)については、厳密に言えば自校史教育の範疇に入るものではない。しかし、自校史教育を支える大学史資料の存在とその重要性に照らして、大学におけるアーカイブズ組織に対する認識を喚起するために設けたものである。
- (21) 受講者の所属学部と人数内訳は、文学部二、法学部一、経済学部一、理学部二、農学部四、医学部二であった。
- (22) カッコ内の丸数字は、講義回数を示している。
- (23) 設問内容に「あてはまる」が五ポイント、「ややあてはまる」が四ポイント、「どちらともいえない」が三ポイント、「あまりあてはまらない」が二ポイント、「あてはまらない」が一ポイントとして集計される。なお、ここで紹介する設問内容については、主旨を損なわない範囲で表現を簡略化している。
- (24) 寺崎昌男「私の大学アーカイブス論―回想・状況・意義―」三七―三八頁(明治大学大学史料委員会『大学史紀要 紫紺の歷程』第五号、二〇〇一年所収)。なお、寺崎氏は、同趣旨のことを二〇〇一年九月に大学史資料室が開催した公開シンポジウムでの講演において、「これ(自校史教育―引用者注)は教養教育だと思います。言葉の真の意味における「教養」というものが自分の発見であるとするれば、まさに自己の発見のための機会を、例えばそのような授業(自校史教育のこと―引用者注)が与えてくれるのです」と発言している。
- (25) 受講者の所属学部と人数内訳は、二〇〇一年度が文学部五、教育学部一、経済学部四、工学部一三であり、二〇〇二年度が文

学部六、経済学部一、情報文化学部四、理学部二、工学部八であった。なお、二〇〇二年度の講義は、原則として文学部・教育学部・経済学部の一年次前期を対象とするものであるが、実際には前記のようにそれ以外の学部（学年）の学生も受講していた。

(26) 名古屋大学『2001 SYLLABUS 全学共通科目授業要覧』による。なお、二〇〇二年度分についてもほぼ同じ内容である。

(27) この「名大史ブックレット」シリーズは、学内の「教育研究改革・改善プロジェクト」経費を得て刊行したものである。なお、この名大史ブックレットは、一冊一テーマの方針で各冊五、六〇頁程度の冊子であり、単なる自校史講義用教材にとどまらず、本学職員・学生はもとより本学の歴史に関心を寄せる一般市民等にも気軽に読めるような名大史入門書としても活用できるように編集されている。

(28) カッコ内の「総」は二〇〇一年度（総合科目）、「基」は二〇〇二年度（基本主題科目）を示し、丸数字は講義回数を示している。

(29) 既刊のタイトルは、次のとおりである（刊行順）。「これまでの大学院・これからの大学院」「名古屋大学 キャンパスの歴史1（学部編）」「名古屋大学 スポーツの歴史」「豊田講堂と古川図書館―名古屋大学の寄付建物―」「名古屋大学最初の外国人教師―ヨングハンス先生とローレッツ先生―」

(30) 紙幅の関係上、本稿において大学アーカイブズ機能論を詳述することはできないので、それについては別の機会に行ないたい。

(31) なお、文書管理入門講義である「情報公開と文書資料―文書の世界を歩く―」はIV期に開講する予定である。

(32) その際、それぞれの教育を担当する専門的なスタッフが必要であることは改めて指摘するまでもないであろう。

（やまぐち・たくじ 大学史資料室）